

## まえがき

本書は平成14年度アジア経済研究所開発研究部研究会「開発途上国の個性と金融制度」の1年間の研究成果をとりまとめたものである。また、本書は『アジア通貨危機—その原因と対応の問題点—』（国宗浩三編，2000年1月，研究双書 No. 501），『金融と企業の再構築—アジアの経験—』（国宗浩三編，2000年12月，研究双書 No. 510），そして『アジア諸国金融改革の論点—「強固な」金融システムを目指して—』（国宗浩三編，2001年12月，研究双書 No. 519），の3冊のアジア金融を題材とする書の問題意識の延長線上に位置づけられる。

これら一連のアジア金融についての研究は，アジア危機を契機としていることはいうまでもない。最初の二つの研究は，それぞれ，アジア危機の原因と危機後の金融・経済の建て直しという時宜にかなう考察を試みた。続く第3の研究では危機についての考察から問題意識を発展させ，アジア諸国におけるノーマティブ（規範的）な金融システムの構築へ向けての分析に取り組んだ。そして，これらの分析をとおして，グローバル化が途上国の金融問題を規定するひとつの重大な与件・環境であるという認識が培われてきた。

そこで，本書では，金融のグローバル化という観点から途上国の金融・経済問題を俯瞰することを試みた。この広範なテーマを分析するにあたって，金融グローバル化の進展とその影響，グローバル化への途上国の対応，そして通貨・金融危機への対応の三つに大きく問題を分けし，議論を展開した。

本書を手にした読者諸氏には，「金融におけるグローバル化は，途上国にとって是非か」という疑問を抱かれている方々も多いかもしれない。しかし，金融グローバル化は，途上国にとっては，好むと好まざるとにかかわらず避けることのできない変化である，というのが本書の見地である。そして，

こうした不可避の変化であるグローバル化に関して、途上国がそこから便益を引き出すにはどのような課題が残されているのかについて、本書ではさまざまな角度から光を当てている。

なお、本書の完成までに、多くの方々にお世話になった。池尾和人氏（慶應義塾大学）には、研究会の専門員として、研究会での議論に参加いただいた。また、レフェリーからは、本書の構成から各章の内容まで、多岐にわたって本書を改善するための貴重なコメントをいただいた。これらすべての方々に深く感謝の意を表したい。もちろん、本書に残る誤りがあれば、すべて編者に帰すものである。

2003年12月

編 者